図書館ノベルティグッズによる“推し活動”
－理工学メディアセンターの事例を中心に－

西條（さいじょう）　智架（ちか）
（理工学メディアセンター）

1　はじめに

「STAY SCIENTIFIC!」（科学的にいこうぜ！）の合言葉と館名をいれた画面クリーナーを，2021年度の理工学メディアセンター（以下「理工」とする）ノベルティグッズとして作製した。理工では，2011年より本格的にオリジナルノベルティグッズを企画制作し始め，その後も継続している。2021年，開館50年の節目を迎える理工において，ノベルティグッズの企画制作は近年の重要な活動の一つであり，ずばり（自らを推す）“推し活動”である。本稿では，そんな理工での“推し活動”，ノベルティグッズ制作について，他キャンパスメディアセンターのケースにも触れつつ振り返る。また今後の展望についても述べたい。

2　図書館ノベルティグッズ：目的と役割

日本の図書館でオリジナルグッズの制作に注目が集まり始めたのは2009年頃からと思われ[1)]，一時のトレンドから10年以上が経過している。単に図書館グッズやライブラリー・グッズと聞くと，オールドタイプな図書館員である筆者は，蔵書印や禁帯出シールといった装備用品など，図書館で専門に使用されるグッズを思い浮かべてしまう。図書館サービスや存在自体のアピール，認知度向上および利用促進を主な目的としたオリジナルグッズ，無料配付（非売品）であることを前提とすると，（些か面倒くさくはあるが）ここでは「図書館ノベルティグッズ」と銘打つことにしたい。

図書館ノベルティグッズ制作の目的は図書館の広報という点に集約される。そして目的達成のプロセスとして，メディアセンターでは複数の役割を兼ねるノベルティグッズの活用が見られる。特に，図書館での展示や講演会，オリエンテーションや各種セミナーといったイベントへの参加促進を狙いとした景品として，また，オープンキャンパスの見学者，読書推進活動や選書ツアー参加者への記念品としての活用が主だっている。更には，刊行物への寄稿者，セミナー講師を務める教職員，アンケート調査回答者への御礼品，機関リポジトリや学習相談活動といった特定のサービスの宣伝品としての用途も見られる。

3　図書館ノベルティグッズの制作事例

(1) 定番のステーショナリー

これまで理工や他のメディアセンターで企画制作されてきたノベルティグッズで，ザ・定番といえるのは，クリアファイル，メモ帳，ボールペンに付箋といったステーショナリーであろう。理工でのノベルティグッズ制作も，ステーショナリーから始まっている。2011年度，理工とその機関リポジトリであるΣStar（シグマスター），そして学生相談窓口S-Circle（エス・サークル）[2)]のクリアファイルを，それぞれの名称やロゴデザイン入りで作製した。加えて理工の館名入りブロックメモパッド，ΣStarの４色付箋も作製している。しばらくは在庫を配布し，不足した場合は追加発注していたが，2014年度末のS-Circle活動終了を機にグッズの見直しを図った。クリアファイルはデザインを刷新し，更に2016年度には，「Keio SciTech Library」の文字が入ったフリクションペンを作製した。

ステーショナリーの中でも，特に紙ファイル・クリアファイルは作製事例が多い。遡ると20年近く前から三田メディアセンターと日吉メディアセンター（以下「日吉」とする）で作製しており，直近ではメディアセンター本部が，早慶図書館システム共同運用記念シンポジウムの記念品としてオリジナルクリアファイルを作製している[3)]。理工でも2017年度に展示企画と連動して，デザインに『訓蒙 窮理図解』（きんもうきゅうりずかい）の表題頁を大胆に用いたクリアファイルを新たに作製し，好評だったため，翌年も1000枚追加発注した。

図書館ノベルティグッズとしてステーショナリーを選ぶ利点は，まず実用的であること，そして学習や研究活動，図書館の利用と相性が良いことである。栞やブックカバーなどは，カウンターに常備しやすく，一定の需要がある。栞は手作りもしやすいため，理工ではサービスに関する豆知識や，院生スタッフによる学習相談活動「ラーニングサポート」の案内を載せて，常時配布している。日吉でも学生による学習相談（ピア・サポート）活動の公式マスコット「ぴあくろう＆コノハちゃん」[4] のデザインを用いて，サービスに関するQ＆Aを載せた栞を作製している。

ステーショナリーは予算に応じたアイテム選択や数量の調整がしやすい一方で，必ずしも利用者にとって貰って嬉しいものとはならず，時に“不要”なものともなり得る。追加発注が比較的容易なため，定番アイテム・デザインとして定着させ，お馴染み感を目指すことも可能だが，“また同じもの？”という飽きの感情は，図書館のイメージをマイナスにしかねない。デザインの更新時や配付対象とする利用者層の需要やトレンドを見定める必要があり，企画担当は“試されている”と感じる。

図１　『訓蒙 窮理図解』クリアファイルとフリクションペン

(2) 多目的なバッグ

図書館ノベルティグッズとして，バッグ・手提げ袋の企画制作は日吉が早くから取り組んでおり，2011年頃より不織布バックを作製している。本誌MediaNetの巻末資料にある年度ごとの「主な出来事」にも，日吉から数年ごとに報告があるように，何度かデザインを変えつつも，ベーシックな日吉図書館のシルエットロゴはそのままに作製を続け，オリジナルグッズとしての愛着が感じられる。学生のみならず，教職員が持ち歩く姿をキャンパス内で見かけると，嬉しさを隠せない。

2020年度，理工では図書館の見学を希望する高校生を主な配付対象として，肩掛け紐付きのポリ製ショルダーバッグを作製した。一般的にはショッパーと呼ばれる，スポーツ用品店等で商品を購入すると入れてくれるタイプのショルダーバッグである。前述の日吉の不織布バッグを参考にしつつも，ショルダーバッグに決定した経緯は，以前より貸出図書の持ち帰り用の袋の要望があり，それならば雨天時に水濡れを防ぐことができるポリ製が望ましいという提案からであった。また，学内付属高校生や在学生への事前ヒアリングにて，同タイプのショルダーバッグは，部活動をはじめ様々な用途で再利用できるなど，好意的な意見があったことも後押しとなった。デザインは理工学部システムデザイン工学科の院生に依頼し，高校生向けとしてはシンプルだが，洗練されたデザインを目指した。

このショルダーバッグは，2020年度初めに配付開始を予定し，予算やデザインなど企画準備，業者への発注から納品まで2019年度後半よりスケジュールを進めていた。しかし，新型コロナウイルス感染症拡大に伴う休館やイベントの中止を余儀なくされ，500枚作製したショルダーバッグは行き場を失ってしまったのである。2020年６月の開館再開後も，しばらくは閲覧席の利用を禁止せざるをえず，“必要かつ急を要する”来館者への貸出が主なサービスであったため，まずはかねてからの要望どおり，貸出図書を持ち帰るためのショルダーバッグとして提供を始めた。雨天時は重宝され受け取る利用者が多かったので胸をなでおろした。また，やはり最初の目的だった高校生へ届けたいという思いから，学内付属校の図書室へ希望枚数を送付し，配付を依頼した。体操着入れに丁度良いとの声もあり，無駄にならずに済んだのは，多目的なバッグであったからのように思う。

図２　ポリ製ショルダーバッグ

(3) STAY SCIENTIFIC！画面クリーナー

2021年度，理工では矢上キャンパス所属の学生を主な配付対象として，冒頭で挙げたマイクロファイバークロスの画面クリーナーを作製した。企画段階の2020年秋もコロナ禍が続き，提供可能なサービスやイベント等も見通しが立たない状況ではあったが，グッズ制作の流れは維持するべきとして作製を決定した。また，困難に直面している在学生を少しでも元気付けたいという思いもあった。理工の館名の他に，在学生へ向けたメッセージを印字する案とともに，三色ボールペン，不織布マチ付きバッグ，そして画面クリーナーがノベルティグッズ候補として挙がった。候補グッズはいずれも個包装のものを選び，一般企業での作製サンプルも参考にした。最終的には，学生の意見としてラーニングサポートのスタッフに票を投じてもらい，職員側の意見との総評にて画面クリーナーに決定した。スマートフォンやモバイルタブレット端末の普及もしかり，液晶画面の製品を持ち歩くことに着目したことが大きい。

印字する館名は英字表記で，メッセージは合言葉「STAY SCIENTIFIC!」とした。学生を応援する気持ちと，悲しくもコロナ禍で一部に漂う非科学的風潮には抗っていく姿勢を，ScienceとTechnologyを冠する図書館として示していきたいという思いがあった。

図３　画面クリーナー

2021年度に入り，ようやく対面授業や研究活動が再開し始めた。こうして迎えた春学期試験の１週間前に，この画面クリーナーの配布を開始した。まずは限定100枚として，カウンターに申し出てくれた来館者へ渡すことにした。配付についての周知は，主に館内のポスター掲示とTwitterにとどめた。広報ツイートには，カウンターで合言葉を言って申し出て欲しいとつぶやいてみたものの，申し出た希望者で合言葉を言った人は未だ一人もいない。勇気を出して言ってくれた方には「Wipe as you like!」（お好きに拭いてね！）と，返答する準備も密かにしていただけに少し寂しい…。一方で，受け取った学生が画像をつけたツイートで配付について広めてくれたり，意外と使えるといった反応もあり，今後のノベルティグッズ制作にささやかな希望を感じることができた。

4　展望と課題

ノベルティグッズ制作は広報手段であると同時に，結びつく先の図書館サービスの一環と考え，今後も積極的に推していきたい。しかし，アッと言わせたいだけのグッズ制作ばかりが前面に出て，提供しているサービスが置き去りになってはならない一方，単なる“おまけ”としての価値に留まることも違うように思う。そして，安価なアイデアグッズや便利グッズが巷にあふれる今，賢い利用者がモノに釣られないことも我々は知っている。

ノベルティグッズ制作を図書館サービスと利用者を結ぶ糸口とするためには，伝えたい内容（サービス）や対象（利用者）を明確にし，ただ慣例や惰性として続けるのではなく，更新しながら継続する必要があると思う。今後も図書館の“推し活動”として利用者の関心を触発するようなノベルティグッズの作製に取り組んでいきたい。

参考文献

１）渡辺由利子．ライブラリー・グッズの可能性―ミュージアム，米・英の国立図書館の事例を通して．カレントアウェアネス．2011，no. 307，p. 23-28.
２）伊藤奈保．S-Circleの軌跡とロゴの想い．Medianet．2012，no. 19，p. 43.
３）関口素子．システム共同運用記念シンポジウム：早慶図書館の挑戦：その舞台裏（特集　早慶図書館システム共同運用）．Medianet．2020，no. 27，p. 36-39.
４）友野詩穂．ぴあくろう&コノハちゃん：デビューからこれまでの軌跡．Medianet．2017，no. 24，p. 81.